

中世都市共同体論についての覚え書き

小 西 瑞 恵

はじめに

戦後の中世都市研究は、1970 年代後半から隆盛期を迎えて進展してきた。なかでも中世都市京都の研究が中心となってきたが、日本で初めての本格的な都市計画のもとに造営された首都平安京から出発し、鎌倉時代には公家政権の所在地として、また建武政権や室町幕府の首都として発達した京都が、平城京から出発した奈良や武家政権の首都鎌倉と比較して、より重要視されてきたのは当然のことであろう。

都市京都の研究史をみれば、数多くの著書・論文が挙げられるが、その基調は、林屋辰三郎『町衆—京都における「市民」形成史—』¹や、京都市編『京都の歴史』全 10 巻²、また秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』³などによって形成されてきたと思われる。これらを受け継いで、1975 年以降、京都についての優れた研究が発表されていった⁴。また、やや視点が異なる研究として、平氏政権の本拠地である洛東の六波羅や鎌倉幕府成立後の京都、とくに承久の乱後、六波羅探題が設置された以降の京都を分析した研究も発表されている⁵。しかし、このように研究が精緻になる一方、戦後の中世都市研究の出発点となった「町衆」論と新しい研究成果に、ずれがみられるようになったと思う。

昨年上梓された五島邦治著『京都 町共同体成立史の研究』⁶は、林屋辰三郎氏による「町衆」論を新しく書き換えようとした仕事であり、今後の中世都市共同体論の発展に大きく寄与する仕事であると思う。五島説については、別のところで紹介を行った⁷が、十分な紙数を費やしたものではなかったため、五島説の詳細やその学説的な位置について意を尽くせなかった。また、五島説が取り上げていない最近の中世都市研究における新しい成果についても、述べておく必要があるため、ここで取り上げて検討を加えたい。一方、永島福太郎著『中世畿内における都市の発達』の刊行も、戦後の中世都市史における重要な学説をあらためて公表したという意味で、喜ばしいかぎりであった。この著書についても書評を行った⁸が、中世都市研究は、今新しい段階を迎えようとしていると考え、さらに研究が進展することを願って、問題点を整理しておきたい。

一 都市民の成立について

五島説の最大の特徴は、従来は林屋説によって、平安京成立後の京都の都市民は「京戸」^{きやうこ}であり、それが「京童」^{きやうわらべ}になり、「町衆」に進化するとされていた点について疑義を提出し、中世の都市民としての「町衆」の成立過程や実態について、異なる見解を提起したところにある。平安京建設後の最初の都市民である「京戸」については、林屋説の段階とは違って、現在ではもっと具体的な説明がおこなわれるようになっている。たとえば、鎌田道隆氏によると、9 世紀の段

階における平安京の住民は、宅地を班給されて京中に住んだ貴族をはじめ、課税が他地域に比して軽かった一般庶民、地方から徴発された課役民などをあわせ、10万人から15万人までの間であったというが、このうち左右京職によって戸籍に付された住民を京戸といい、その多くは、京外、時には山城国以外の遠隔地に口分田を与えられた農民的存在であったが、口分田の耕営は不利な条件にあったから、農業生産を離れ、官衙や貴族の家政に関わるもの、東西市の市人をはじめとする商工業に従事するものなども、早くから現れていたと説明している⁹。

五島説はさらに進んで、京戸と平安京に住む都市民の実勢とのずれを指摘し、新興都市民を表すことばをさまざまに検討したうえで、新興都市民をさす特定のことばは成立しなかったという。新興都市民は、都市と地方をともに生活基盤として分有し、その間を往来するという都市民としては不徹底なもので、この背景には都市と地方との未分化があったというのである。そして、摂関時代の都市民の実態については、都市型官人とより身分の低い大工・瓦師などの都市民から成り、検非違使の麾下にある保刀禰とよばれる人々が、確立しつつある地縁的な社会の行政上の末端組織に属する下級官人であったとしている。

このような主張は、これまでも一般的にみられたものである。学説史的な位置付けをするならば、戸田芳実氏が1973年に発表した「王朝都市論の問題点」と、1976年の「王朝都市と荘園体制」が大きな影響を及ぼしていると思われる¹⁰。戸田芳実氏の王朝都市論については、すでに取り上げたことがある¹¹。前者の「王朝都市論の問題点」においては、王朝国家の都としての京都を「王朝都市」と規定し、5つの課題を提起したが、そのなかで、都市住民の実態の究明が、具体的に追求されていた。また、後者の「王朝都市と荘園体制」において取り上げられたのは、荘園体制の発展と深く結びついていた都市の倉庫群とその経営者および要員の動き方であり、洛中左京の都市構造変化を中心に、それと有機的に結合して周辺地域が荘園制的な形態で都市に組み入れられ、中世京都の都市的景観が形成されてくる姿が解明されている。日本の伝統的市街住宅である町屋の形成過程を明らかにした野口徹著『中世京都の町屋』¹²で、野口氏が町屋の先駆形態とする付属屋・門屋の実質的な統括者が、権門一下級官人一庶人という重層的構成において、都市中間層たる下級官人層で、かれらが庶民一般を対象とする町屋の形成においても、リーダーシップをとっていたとする見解が明らかにされている。五島説は、町屋の形成過程まで論及していないが、戸田説と野口説とがそれぞれの立場で解明した、初期都市民のなかで中間層たる下級官人が果たした指導的役割について、定説を確認したことになるだろう。

また、戸田説は、摂関期の往復書簡を編集した教科書用消息文集である『高山寺本古往来』に登場する、都市と農村を往復し、京都に深い関わりをもつ摂関時代の地方有力者たちを、〈国内名士〉と呼んだが、それは農村的・都市的性格をあわせ持ち、農村的具體性がつよく、階層としては在庁官人・中下級貴族が想定されていた。荘園文書にあらわれる地方有力者の名称を強いてかれらにあてはめるならば、大名田堵・私領主・納所預など預人、郡郷司・舍人・在庁書生・国侍・荘官その他であって、「国の住人」、「国人」の代表的存在である。また、中央官司・権門社寺の直属の官職・身分を帯びる地方在住者や、国内社寺の神官寺僧など、国内の社会的分業・流通・交通を担う諸集団の上層（長者的存在）もこれにあたる。次の院政時代に、国内名士が具体

的にどういうあり方を示すのかという例は、都市貴族的家系、白河院召次勾当、愛智郡司、日吉新宮神事勤仕人などの地位を兼ね、近江における典型的な国内名士というべき中原成行をあげて説明している。私はかつて戸田芳実氏の国内名士論について、従来の商業史（ないし都市史）と領主制論を統合したもの、という研究史的位置付けを行った。現在でもその評価は基本的に変わっていないが、これ以後、この国内名士論を継承する仕事は現れず、研究史の上では、孤立したままであった。五島説は、あらためて都市京都の側から、戸田氏の国内名士論を受けとめたといえよう。

中世都市論を代表する立場にあった網野善彦氏は、戸田芳実氏を偲ぶ文章のなかで¹³、みずからの「非農業」民研究（具体的には、鋳物師や海民の研究）が、戸田芳実氏の都市と分業、交通論に触発されながら形成されたと述べている。そのような視点で回顧するならば、1970年代後半から始まる都市史の発展期の先駆けとなった網野善彦氏の「中世都市論」¹⁴に対する評価も、おのずから変わってくる。「中世都市論」の新しさは、独特の大胆な社会史的手法で、中世都市像の書き換えに成功したことにある。その新しさは随所にみられるが、中世（10世紀ころから）、都市および都市的な場は、田畠等と区別され、「地」とよばれたとする指摘などが、それにあたる。地奉行・地方頭人・地口銭・地百姓・地上銭等々は、みなこの語から生れた言葉であるとする。網野善彦氏の場合、都市的な場は無縁の地という特質をもつが、無主の論理と有主の論理が複雑に交叉する（無主の論理は、たやすく有主の論理に転化する）かたちでの無縁の地であり、その内容は決して単純ではない。「無縁」の地には、「無縁」の輩が集散する。「道々の輩」をはじめ、「白拍子・御子・田楽・呪師・猿楽・乞食・非人・盲聾病痾の類」といった「遊手浮食の輩」がそれである。

網野善彦氏は公家・武家のいう「遊手浮食の輩」の多くは、遍歴する「芸能民」であり、この人々こそが、まさしく都市民の源流であったと述べている。戸田説の国内名士論との関わりでいえば、かれらは非農業的な生業に携りつつ、召次・雑色・駕輿丁として天皇・摂関家に仕える下級の準官人から、清水坂・北山・奈良坂等に本拠をもち、長吏に率いられて畿内一帯で活動した非人の集団を含む人々であったというから、明らかに内容が異なり、国内名士層より下層の民衆を含み、階層的により広汎な人々から構成されている。この点で、戸田説を継承すると思われる五島説の初期都市民論とも異なると思われるのである。また、網野善彦氏の場合、よく知られる通り、中世社会を中世前期（平安末・鎌倉時代）と中世後期（南北朝・室町時代）に分けて構想するのが常であり、南北朝末から室町初期の成立といわれる『庭訓往来』を使って、「職人」の定着と「地百姓」の成立を論じ、このころになれば、それまで遍歴していた「職人」たちは、寺社の門前や関渡津泊等にぞくぞくと集住、定着し始めるとした。商人・手工業者としての職人と芸能民の分化も進行し、星雲状態にあった都市はここにくっきりとした姿を現してくるという。私見によれば、中世後期に都市的発展の転換期を求めるのは大筋では定説であると思うが、網野説の場合、やや遍歴と定着の時期と形態の分析が図式的であり、より精密な検討と分析が必要である。この問題については、地域的な偏差や遍歴と定着との形態・内実の質に応じて、さまざまな見解がありうると思うが、今後の検討課題にしておきたい。

二 保の成立と下級官人としての保刀禰

戸田芳実氏は、平安京行政区画（条坊制の保）の変化の問題について、前述の「王朝都市論の問題点」の中で、九条家本延喜式裏文書にある1035-36年（長元8-9）の左京保刀禰請文16通を使って、次のように述べている。これは、検非違使庁から下った賭博取締令に対する保刀禰らの領状の請文である。これによるかぎり、使庁警察行政の対象となる単位的区域に三類型があった。それは、①条坊制の保、②院の保ともいべきもの（冷泉院東保）、③官衙町（采女町）、の三つである。①の型は本来の保であるが、たとえば1028-37年（長元年間）の刀禰請文にみえる左京二条三坊三保の場合、この保四町のうち西北の一町は、「小野宮」の邸宅であった。九世紀の格によると、そのように「坊里」に「卿相の家」が錯綜する場合、六位の院（家）司や官人を保長として保内を肅清する規定であったが、この場合、小野宮を含む二条三坊三保の検察は、無位の刀禰二名（橘山高・宗賀部正忠）が担当していた。

②の型の実例となるのは、冷泉院東保である。冷泉院とはもと嵯峨天皇の後院で、復興後、冷泉天皇の後院となった。冷泉院東保は、左京二条二坊二保の全域四町を占め、現在の二条城東北部分にあたる。撰関期の長元年間に、「冷泉院東保」というかたちで、東西に二分された検察単位に変化して現れる。かつてのような大邸宅地ではなく、賭博にふけるような雑人らの居住地に変貌し、それに応じて保に編成されたものである。戸田芳実氏がふれている通り、『今昔物語集』巻27-5にある説話によると、ここは1012年（寛弘8）の冷泉院の死後、その冷泉院の小路を開き、北の町は人家共になり、南の町に池など少し残っていたが、そこにも人が住んでいたという。東保・西保との関係は解らないが、上述したような新しい町と保の出現を反映する説話である。③の型の官衙町で長元の請文にある采女町は、官衙町自体が保に相当する検察行政区画とされたものである。

このようにみるならば、かつて私が「中世都市の保について」¹⁵で取り上げたような祇園社領の四条南北保・伊戸田保や、八坂保・大政所保・荒町保・高畠保・瓜町保・葱町保・瓜町保、あるいは松尾社の保や北野社の西京七保等の実例についても、都市住民が主体となった成立過程を推論できると思う。条坊制をとらない京都近郊の宇治の番保や大山崎上下十一保についても、基本的に同様である。

ところで、戸田芳実説にかぎらず、中世京都の警察制度を検討した黒田紘一郎氏、また、検非違使庁の洛中内の寺社本所領には寄検非違使（寺社寄検非違使）がいたことを提起した五味文彦氏は、いずれも、保刀禰については、おもに検断権から考察してきた¹⁶。保と保刀禰についての学説史で、最初に地歩を印した清水三男氏が、神社の保について検断の保と神人の保に分けて考察しているが、その問題点は解決されていなかった。私はかつて大山崎惣町共同体について論じた際に、大山崎上下十一保の地主神である山崎神社（酒解神社・天神八王子社）の祭礼組織から、保の成立を考えたが、以後、都市共同体の成立については、祭祀組織からみる視点が一般的になったと思う。五島邦治氏の京都町共同体成立についての分析も、このような視点からであるが、保刀禰について下級官人であると明言している。次にこの問題について検討したい。

いうまでもなく、保や町といった地域共同体を支配する保刀禰は、行政上の末端組織として検

非違使の麾下にあった。五島邦治氏が使用した史料は、949年（天曆3）・979年（天元2）・993年（正暦4）の3通の七条令解と、戸田芳実氏が分析した1035年（長元8）12月から翌年正月にかけての一連の16通の保刀禰請状（九条家本延喜式裏文書）である。実際に94-100頁に掲げられた「有力都市民の呼称」の一覧表によって、保刀禰に代表される地域の有力都市民の実像を知ることができる。ここでふれておきたいのは、五島邦治氏も引用している大山崎の場合である。

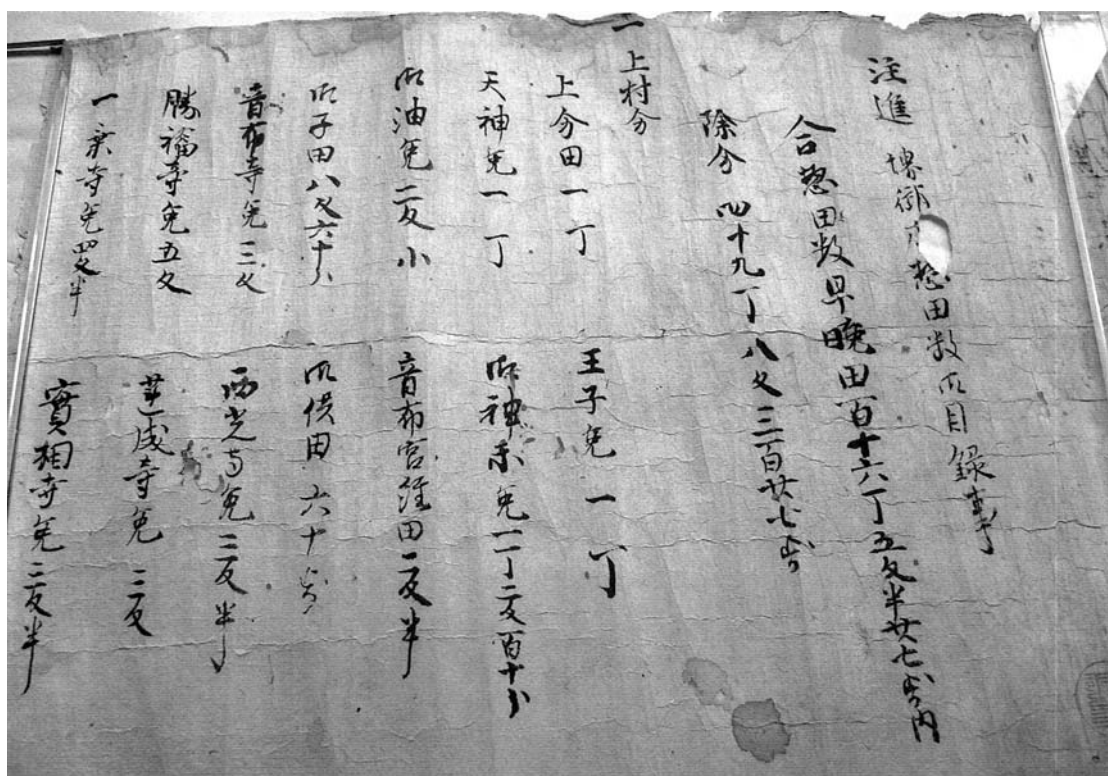
かつて私は、大山崎宝積寺文書を閲覧し、1257年（正嘉元）の「山崎長者等山寄進状（一志則友等山寄進状）」を使って、八人の長者が大山崎を統轄していたことを明らかにした¹⁷。ここにみえる長者衆は、「長者左馬允清原」や「長者左近将監菅原」といった官途や姓名からして、下級官人層である。かれらは保刀禰ではないが、大山崎十一保の行政をつかさどり、天神八王子大政所長者八人を構成していた。かつて山崎津には刀禰が津政所にいて検非違使の支配を受けていたが、鎌倉時代の大山崎十一保は、長者衆を長老とする老若の惣町共同体として大山崎惣中を構成していた。石清水八幡宮大山崎神人の本拠地として、京都の町々に新加神人を居住させていたから、新加神人については、京都町共同体の構成員であった。

三 堺についての新史料

永島福太郎著『畿内における都市の発達』¹⁸の刊行により、堺についての新史料が公表された。「第三章 阪神地方の港津の発達」のなかで、港町堺について、住吉社ないし南都諸社の魚菜供給地としての一面をもち、堺南北荘から発達し、宿場でもあったと記したうえで、新たに発見した元亨3年（1323）7月の「堺御庄上下村目録帳」写（奈良県文化財指定「海竜王寺文書」）について記している。

これによると、堺荘の惣田数は早晚田を合わせて116町5反半27歩（207歩）、上下両村に分かれ、年貢免除地が49町8反余もあり、上村だけでも、王子・天神・音布宮の神社、音布寺・西光寺・勝福寺・蓮成寺・一乗寺・実相寺などの寺院の免田がみえる。この史料は、三浦周行監修『堺市史』（1929-31）にも、戦後の『続堺市史』にも収載されていないため、この論文をのぞけば、堺研究で使われたことがない。堺荘（南北荘）については、従来惣田数が不明であると考えられてきたが、この新史料によって、堺の歴史が変わることになった。もっとも、この史料がまったく知られていなかったわけではない。『日本歴史地名大系30 奈良県の地名』¹⁹の「海竜王寺」の項目には、海竜王寺文書が引用されている。しかし、「堺荘惣田数目録」が残っていることを記し、摂津・和泉両国にまたがっていた最勝光院領堺荘（現堺市）のものかとも考えられるが、同荘にかかわりをもっていたことが推測されるにすぎないとしている。

永島説では、堺荘は建武新政時代（1334年）ごろからは堺南北両荘が明らかに区別され（『住吉神社文書』）、東寺最勝光院領としては摂津堺荘とみえ、1304年（嘉元2）に天王寺遍照光院領となった堺荘は和泉とある（『伏見宮御記録』）。そして、開口社付近に塩穴荘があり、これは上条・下条両郷に分かれていた（『開口神社文書』）。荘名は荘園領主がその収益権の対象として立てるものだから、一土地において両荘名を有することもあるが²⁰、いちおう、摂津領を堺北荘、和泉領を塩穴荘を含んで堺南荘といったとするほかはないとしている。因みに、塩穴荘の本家は春



「堺御庄上下村目録帳」

日社である。また、上村にある王子・天神・音布宮の神社、音布寺・西光寺・勝福寺・蓮成寺・一乗寺・実相寺などの寺院の免田が見えることについて、この社寺はすべてとはいえないが、その多くは荘内に存在していたと述べている。

また、この「堺庄田数帳」は、奈良の海竜王寺に伝来したが、なぜ所蔵したかは詳かではない。その当時、海竜王寺、ないしこの寺に隣接しているその本寺の法華寺（真言律宗を開いた西大寺叡尊上人が末寺とする）の尼僧たちのうちで、堺北荘の本家職を領有していた者（もちろん、貴族藤原氏出身者）があったものと考えたいと述べている。

この海竜王寺文書は、現在は西大寺の寺倉に保存されている。今年9月14日に西大寺で、元亨3年7月の「堺御庄上下村目録帳」（海竜王寺文書 107 の7）を閲覧し、調査することができた²¹。上に冒頭部分の写真を掲げるところである。この「堺御庄上下村目録帳」は、「一 上村分」「一 御母分」と続き、おそらく「一 下村分」とあったはずの箇所は、虫食いで判読できない。しかし、端裏書に「元亨三年」「注進 堺御庄上下村目録帳」とあるから、その箇所は「一 下村分」と断定できる。この注進状の差出人は「公文 僧明賢」であるが、「御庄官所三人」、「三方役」とある。「三方」とは、上村分・御母分・下村分の三方を指すのではないかと思われる。このうち、「御母分」については、別の箇所に「御母厨米八斗四升」とあり、惣田数早晚田 116 町 5 反 207 歩（除田 49 町 8 反 327 歩）の堺荘の荘園領主、ないし給主としての「御母分」であろう。下村が堺北荘内にみえる文書が『開口神社文書』にあるから²²、この史料は摂津堺荘、すなわち堺北荘のものだという永島説は正しいと考える。

この「堺御庄上下村目録帳」が、堺北荘のものだということについて、さらに考証を付け加え

注進 堀御庄惣田數目録書

合惣田數早晚田百十六丁五反半七合内

餘合 四十九丁八反三合七合

二 上村分

上分田一丁

天神免一丁

比油免二反小

比子田八反六分

音布寺免三反

勝福寺免五反

一乘寺免四反半

王子免一丁

作神末免二丁五反六分

音布宮窪田二反半

比俣田六十分

西芝寺免三反半

草成寺免三反

實相寺免三反半

たい。「一 上村分」に含まれる寺社のうち、「王子免」とある王子社は、永島説のとおり、俗に熊野九十九王子と呼ばれるなかの堺王子社の免田である。この堺王子跡は、堺市北田出井町3丁あたりに比定されている。1343年（康永2）11月10日の「道阿弥陀仏畠地売券」によると、住吉郡朴（榎）津郷の「皇子北」の畑1反半が、兵衛なる者に売られている（『開口神社文書』）。この売券の四至（東西南北の境界）には、「西熊野大道」とみえる。したがって、この畑地は摂津国住吉郡榎津郷にあり、熊野大道の東側に位置し、その南側に堺王子社が位置していた。

また、一乗寺という名前の寺は複数あり、堺市にもかつて一乗寺が存在した。『蔗軒日録』1484年（文明16）4月20日条に、大光国師（通応鏡円）²³の遺跡として、「接州花田県一乗寺」が記されている。これは摂州花田郷のことであり、現在の堺市南花田町一帯に比定される。

いうまでもないが、「天神免一丁」の天神社は、摂津堺北荘の鎮守菅原神社のことである。『蔗軒日録』1486年（文明18）8月1日条に、「祭礼、湯川新九郎云者為頭人、北社同名助大郎云者為頭人、」とある記述の「北社」が、菅原神社（常楽寺）の鎮守としての一番古い史料であるが、この1323年（元亨3）7月の「堺御庄惣田数目録帳」を新たに得て、鎌倉時代から堺北荘の鎮守天神社（菅原神社）が存在した事実を確かめることができた。以上の寺社の考証によって、この堺荘が摂津堺北荘であることは、明らかであろう。

摂津国堺北荘は、1234年（天福2）2月5日の「念仏寺一切経蔵等建立注文」に「建保2年（1214）甲戌、国嘉建立堂、摂津国内北荘ニ建」とあることから、鎌倉時代初めには成立していたことが知られる（『開口神社史料』）。その領家は、1325年（正中2）3月の「最勝光院荘園目録案」²⁴により、今林准后（西園寺実氏室、北山准后四条貞子）とされてきた。最勝光院は1173年（承安3）に建春門院平滋子の立願により後白河法皇が建立し、建春門院の死後、院務職が後白河法皇・後鳥羽上皇・後堀河天皇を経て、後宇多上皇から教王護国寺（東寺）に寄進された（跡地は現京都市東山区）。一方、和泉国堺南荘については、1304年（嘉元2）7月8日の「後深草上皇処分状案」により、天王寺遍照光院領とされてきた。伴瀬明美氏によれば²⁵、ここでは後深草上皇の子・孫にあたる伏見院・後伏見院・遊義門院姪子内親王、妃である准后西園寺相子の他、伏見上皇の正妃である永福門院にも処分がなされている。まず、伏見院に持明院統の最重要所領長講堂領が譲与され、遊義門院には以前より彼女の母東二条院（藤原公子）が沙汰していた長講堂領中の伏見御領の知行が認められ、准后相子には長講堂領の土御門第が譲られ、永福門院にも長講堂領中の葺屋荘をはじめ後深草院が外戚西園寺家から伝領した所領が譲られた。これら所領は分割譲与されてはいるが、全体として伏見上皇の管領下におかれ、彼女らの自由な処分も認められていないというのが、両統迭立期の王家領についての分析である。

ここで取り上げたいのは、天王寺遍照光院并葺屋・堺等荘が、大宮院藤原姞子（後嵯峨天皇皇后、後深草・龜山天皇の母）并に、その母准后藤原貞子の文書を添え、後深草上皇の子伏見天皇の中宮であった永福門院（藤原鐔子）に譲られている部分である。このうち、摂津国葺屋荘（^{うはら}兎原郡、現神戸市中央区）は長講堂領で、寺役・庁役の日を違えないようにと記されている。また、堺荘は遍照光院役を怠らないようにと命じられているので、堺南荘は天王寺遍照光院領とされてきたのである。伴瀬氏がいう「後深草院が外戚西園寺家から伝領した所領」とは、この堺荘

等を指すと思われる。すなわち、堺南荘も西園寺家が相伝してきたことになる。実は、『鎌倉遺文』では、最勝光院領堺荘と遍照光院領堺荘との両方を、和泉国大鳥郡の堺南荘としている。金井静香氏は、永福門院の所領として両史料にみえる堺荘をあげている²⁶。堺荘は、貞子が領家職を有していた最勝光院領であるが、遍照光院の寺役も勤める荘園であったという。また、天王寺遍照光院は、1256年（康元1）に西園寺実氏が天王寺に建立したという御堂のことではないかと推測している。天王寺遍照光院について明らかになったのは、これが初めてである。

残された問題は、この堺荘が摂津・和泉両国をあわせた堺荘か、それとも和泉国堺荘かという問題であろう。両史料にみえる堺荘を、従来通りに別のものとする意見も存在する。井田寿邦氏は、堺南荘の解説のなかで、1325年（正中2）の最勝光院荘園目録に、「和泉国歟」と記された堺荘の領家を今林准后（姪子内親王）とし、1304年（嘉元2）の後深草上皇処分状案にみえる堺荘とは別のものと思われるとしている。しかし、その根拠は説明されていない。私は新史料の発見によって、堺南荘と同じく堺北荘も王家領であることが確認され、「御母分」の記載により、女院領の可能性が高まったが、遍照光院の寺役がこの史料には見えないし、「地頭分」が存在したから、ただちに両堺荘が一体のもので、領家も同じであったとは結論できないと考える。ただ、今林准后は、『尊卑分脈』に藤原貞子とあり、後深草上皇処分状にも「准后貞子」と記されているので、姪子内親王とする必要はないと思う。後宇多（准）后であった姪子内親王は、1291年（正応4）に遊義門院の宣下を受け、1307年（徳治3）に没している。遊義門院の父母は、後深草天皇と東二条院藤原公子である。

南北朝時代における年末詳後12月28日の院宣では、摂津国堺荘の地頭ならびに領家職について、住吉神社社家（津守氏）の知行を安堵している。堺南荘についても、和泉守護に宛てて出された年末詳9月6日の後村上天皇綸旨²⁷により、住吉神社領であったことが解る。いずれの堺荘も南北朝時代には住吉神社領となるが、それ以前についても、後宇多上皇の院政から後醍醐天皇の親政に移る1321年（元亨1）12月から、後醍醐親政が終了する1331年（元弘1）9月まで²⁸は、親政の影響を考慮しなければならない。摂津国では仙洞領（院領）津守荘（大阪市西成区津守付近）、和泉国では、北白河院（後高倉院妃藤原陳子）領の大鳥荘（堺市東部・高石市）や万代荘（堺市）、大宮院藤原姞子から昭慶門院（龜山天皇皇女）に伝領され、後に世良親王に譲られた大覚寺統王家領の若松荘（堺市）など、堺およびその周辺地域には王家領荘園が多かった。

堺南荘が1304年に永福門院に譲られたとすれば、彼女は1271－1342年（文永8-興国3＝康永1）の年代を生きたから、1323年（元亨3）にも同荘は永福門院の所領であったと思われる。1312年（正和1）12月の「伏見上皇宸筆処分状案」は、永福門院の所領について、一期の管領を確認しているし、1333年（元弘3）6月7日と思われる「後醍醐天皇筆事書」には、今出川院（龜山天皇妃藤原嬉子）御領を永福門院御分としている²⁹。今出川院は西園寺実兼の姉妹である。永福門院の父太政大臣西園寺実兼（母は内大臣源通成女従一位顕子）は、両統迭立期に関東申次として勢力を誇った人物であるが、1322年（元亨2）9月10日に没している事実なども考慮しなければならない。

1323年の7月の「堺御庄上下村荘園目録」には、「地頭分」³⁰や「預所代分」がみえ、「下司」

も置かれていた。種々の用途を差し引いた年貢米は、77石5斗6合余であるが、用途のなかで、「御馬飼」への支出が多いことも注目される。水陸交通路の要衝にあった堺の特性を示すものである。

次に、この文書の発見によって、堺の会合衆が成立する過程について、ある程度実証できる可能性が開かれたと考える。永島氏も述べているように、『開口神社文書』にみえる永正7年(1510)卯月27日の土地売券に刀禰の袖判が押されているが、これは室町初期と思われる『住吉大神宮年中行事』(「東山御文庫文書」)に「開口下司、小塩穴刀禰」とみえる開口神社宮座の長老としての刀禰で、町自治体にも無関係ではないとしている。私も会合衆の起源^{かいごうしゅう}について、豊田説では寺院の集会に起源を持つとされ、泉澄一氏も開口神社の祭礼に関わる有力者の会合にその発祥があるのではないかとしたが(『堺』、教育社、1981年)、それは具体的には座を指すのではないかと指摘したことがある³¹。しかし、堺の会合衆や公界が『蔗軒日録』に登場するのは、1484年(文明16)以降である。鎌倉時代の史料に乏しいために、このような開口神社宮座の長老としての刀禰の存在感が希薄であった。しかし、摂津堺北荘の鎌倉時代末期の史料を得て、あらためて堺北荘においても、天神社(菅原神社)を紐帯にした宮座の成立過程が推測できると思われる。ここにみえる御馬飼や9町を横領している住吉社神人らの存在も、従来明らかにされてきた鎌倉時代の鋳物師、春日社神人たる黄衣神人(和泉国神人)、魚貝商人、荏胡麻油商人等に加えて、堺の都市民の実像をより豊かにしてくれると考える。

おわりに

最近上梓された二冊の著書を取り上げながら、中世都市共同体についての二、三の問題点について論じた。中世都市民の成立については、林屋辰三郎・鎌田道隆・戸田芳実・網野善彦・五島邦治各氏の諸説を紹介しながら、問題点を明らかにしている。次に、保の成立と下級官人としての保刀禰について問題整理を行ったが、戸田芳実説とこれを継承する五島邦治説によって、以前に私が問題提起し、分析を行った「中世都市の保」について、今後さらに検討を重ねなければならない。最後に、中世の堺についての新史料である「堺御庄上下村目録帳」(海竜王寺文書)について、これが摂津堺北荘のものであることを確認し、その意義についても論じた。以上のような新知見と新史料を得て、中世都市堺の研究についても、さらに歩を進めていきたいと考える。

註

- 1 中公新書、昭和39年。
- 2 学芸書林、昭和43～51年。
- 3 法政大学出版局、昭和50年。
- 4 具体的には、戸田芳実・脇田晴子・網野善彦・黒田紘一郎・五味文彦・瀬田勝哉・川嶋将生・馬田綾子の各氏による諸論文である。
- 5 たとえば、高橋慎一朗著『中世の都市と武士』(吉川弘文館、1996年)参照。
- 6 岩田書院、2004年11月。

- 7 『日本歴史』696号、(2006年5月号、掲載予定)参照。
- 8 『ヒストリア』第197号、2005年11月10日。
- 9 『世界大百科事典』、平凡社。
- 10 前者は、『日本史研究』139・140号、1974年3月。後者は、『岩波講座日本歴史4 古代4』、1976年8月。いずれも、『初期中世社会史の研究』所収、東京大学出版会、1991年11月。
- 11 「戸田芳実の都市論・交通論について」、拙著『中世都市共同体の研究』所収、思文閣出版、2000年(初出は、1993年)。
- 12 東京大学出版会、1988年。
- 13 戸田芳実氏追悼文集編集委員会編『戸田芳実の道 追悼思藻』所収、1992年。
- 14 『岩波講座日本歴史7 中世3』、岩波書店、1976年。のちに、網野善彦『日本中世都市の世界』所収、筑摩書房、1996年1月初版。
- 15 『大阪樟蔭女子大学論集』第38号、2001年。
- 16 黒田紘一郎「中世京都の警察制度」、『中世都市京都の研究』(校倉書房、1996年)。五味文彦「使庁の構成と幕府」、『歴史学研究』392号、1973年。
- 17 「中世都市共同体の構造的特質」、『中世都市共同体の研究』所収。
- 18 思文閣出版、2004年10月。
- 19 平凡社、1981年初版。
- 20 『開口神社文書』所収、1234年(天福2)の「開口社堂舎建立次第」によると、摂津国内北荘とみえる事実について、永島説では、これは写であり、今はこれを取らないとする。私見では、史料に問題があるとはしなかった。別に「開口社小塩穴下条内」とあることから、鎌倉時代には住吉神社の造営に応じて、和泉国大鳥郡塩穴郷に属する小塩穴の下条内に堂社が造営される慣例であり、1215年(建保3)4月2日には開口社の付近に塩穴観音が、また4月27日には摂津国内堺北荘に堂が棟上げしたと記している。念仏寺が鎌倉時代に堺北荘内に位置したか、堺南荘内に位置したかは解らないが、念仏寺と一体のものとして、堺北荘内に堂社が存在したことを確認し、『蔗軒日録』1486年(文明18)2月12日条の記事に「印首座今在北庄経堂、々々者地下之公界会所也」とある「経堂」が、これにあたる可能性を指摘した。拙著『中世都市共同体の研究』108頁参照。思文閣出版、2000年2月。
- 21 西大寺での史料調査では、西大寺塔頭清浄院副住職・種智院大学助教授佐伯俊源氏のお世話になった。ここにお礼を記す。
- 22 1486年(文明8)4月5日、「堺北庄公文山崎屋定森折紙」に「下村公文定森」がみえる。『開口神社史料』85頁参照。
- 23 通翁鏡円については、玉村竹二『五山禅僧伝記集成【新装版】』(思文閣出版、2003年)469-470頁参照。
- 24 堺荘の領家が今林准后御分とする1325年(正中2)3月の「最勝光院荘園目録案」(「東寺百合文書ゆ」、『鎌』=『鎌倉遺文』29069)による。豊田武氏は、この史料について、「最勝光院、摂津国堺荘、領家今林准后兵士七人」としている。これ以後、摂津堺荘は、最勝光院領

とされるにいたったものらしい。この史料には、「摂津国」の箇所はないが、前項が摂津国である（豊田武「堺」、『豊田武著作集4 封建都市』所収、吉川弘文館、1983年。初出は1966年）。これによると、建長年中（1249～1256年、後深草天皇の御代）以後は、本年貢油2石・綾被物二疋と9月兵士7人に替わって、代銭1貫文を弁済するだけであった。また、1304年（嘉元2）7月8日の「後深草上皇処分状案」（『鎌』21888）による。しかし、1323年（元亨3）9月25日の「後醍醐天皇綸旨」（『鎌』28533）、年末詳9月17日の「世良親王令旨」など、この時期の西大寺文書等を一覧すると、堺北荘の荘園領主を確定するには、後醍醐天皇親政期の検討が必要となる。永福門院の異母妹後京極院禧子（→礼成門院、母は藤原孝子）は後醍醐天皇中宮であり、永福門院の父西園寺実兼の弟実俊女も、後醍醐天皇の寵を受け、世良親王を生んでいる。このように複雑な血脈人脈も考慮する必要があるので、後考を俟ちたい。後醍醐天皇の皇子たちについては、森茂暁著『皇子たちの南北朝』（中公新書、1988年）参照。なお、永福門院に実子はないが、後伏見天皇の養母であり、夫伏見上皇の没後は京都西園寺邸北山殿（後の金閣寺の地）がおもな居所であった。永福門院の歌と生涯については、西野妙子著『白洲の月』（国文社、昭和59年初版）が詳しい。

- 25 伴瀬明美「院政期～鎌倉期における女院領について—中世前期の王家の在り方とその変化—」、『日本史研究』374号所収、1993年。
- 26 『中世公家領の研究』166頁、思文閣出版、1999年。天王寺遍照光院と思われるこの御堂については、『百鍊抄』康元元年8月20日条参照。西園寺公経の十三年遠忌のために、天王寺安井辺に一堂を建て、この日供養したことがみえる。天王寺安井とは、安井神社（安井天神）がある天王寺区逢阪1丁目辺りか。境内に七名泉の一つの安井があり、当地で菅原道真が筑紫左遷時に船待ちをしたと伝える。
- 27 年末詳の院宣で、「摂津国堺庄地頭并領家職」について、住吉神社神主（社家）の当知行を確認している。堺南荘についての年末詳9月6日の後村上天皇綸旨も、「住吉神社文書」（『堺市史』第四巻資料編第一巻）所収。
- 28 本郷和人「後醍醐天皇親政への一考察」参照（『鎌倉遺文研究』第8号、吉川弘文館、2001年）。
- 29 『鎌』24767、32245参照。
- 30 註27ならびに、1381年（永徳元）9月26日・9月28日・10月9日の堺北荘領家渡辺宗徹書状を参照、『開口神社史料』86-89頁。
- 31 『中世都市共同体の研究』「第三章 戦国都市堺の形成と自治」、思文閣出版、2000年。初出は1986年。

